

奥日光で観察したヘビとカエルの生態

1. 研究の動機

奥日光にはどのような爬虫類・両生類が生息しているのかについて、また爬虫類・両生類についての知識を深く身につけたかったため

調査方法 1日目：クラス全体

⇒歩きつつ、両生類・爬虫類を探索

2日目：班別でのフィールドワーク

⇒ルート探索(右マップ参照)



図1 フィールドワークのコース

2. 調査結果

今回の調査結果で観察できた生き物は、1日目のフィールドワークでのアオダイショウ、2日目のフィールドワークではアズマヒキガエルとシマヘビの、計三種類を観察することができた。去年、日光に行った先輩たちが観察することのできたサンショウウオは残念ながら見つけることはできなかった。アオダイショウについては、しっかりと観察することができなかったため、今回はアズマヒキガエルとシマヘビについて説明する。

シマヘビ：日本（北海道、九州、四国、大隅諸島）に広く分布する。

全長は80-150cm。無毒。通常は淡黄色の体色に4本の黒い縦縞模様が入っている。腹板は目立つ模様はなく、クリーム色や黄色または淡紅色。体の細さに比べて鱗は大きく、皮膚に柔軟性がないため、あまり大きな餌は呑み込めない。伊豆諸島・伊豆諸島産の個体は海鳥の卵や雛しか食べるものがないために大型化し、2mになる個体もいる。逆に、北海道産の個体は小さく、80cmに満たない。

実際に触ってみた感想として、皮はブヨブヨしていたが中は筋肉で出来ているため、がっちりしていたのが印象的だった。怒ると首を縮めて威嚇をしていた。



図2 奥日光の中宮祠で見られたシマヘビ

アズマヒキガエル：日本（東北地方から近畿地方、島根県東部までの山陰地方北部）の自然に分布固有亜種。

伊豆大島、佐渡島、北海道（函館市など）などに移入。

東京都においては在来種のアズマヒキガエルと移入種のニホンヒキガエルとの間で交雑が進んでおり、種の保存や生物多様性の観点から懸念されている。一方で、都内の本種幼生（オタマジャクシ）は周辺各県のオタマジャクシよりも有意に高い生存率を示しており、交雑により都市での適応度が上がり個体数維持に成功しているとの見解もある。



図3 アズマヒキガエル

3. 今後の課題

- 1, ほかにどのような種類の両生類・爬虫類が生息しているのか調べる。
- 2, 爬虫類に関しては、さらに詳しく奥日光のヘビの生態などについて調べる。
- 3, 両生類に関して、過去に先輩たちが発見した個体などが今回の調査では発見することができなかった理由を当時の気候などから予想したい。

4. 参考文献

- ・ニホンヒキガエル - Wikipedia(アクセス日 2022/12/20)
- ・シマヘビ - Wikipedia(アクセス日 2022/12/20)

謝辞

栃木県立博物館の仲田先生には、クラス全体で行った初日のフィールドワークに続き、班別でのフィールドワークでの、大変わかりやすいご説明、大変勉強になりました。誠にありがとうございました。